

# 台湾が直面する航空攻撃の圧力

漢和防務評論 20180908(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国軍の最近 2 年間の戦力配備を見ると、台湾への武力侵攻準備が着々と進んでいるように見えます。  
漢和は特に航空攻撃に焦点を当てて、中国軍の作戦準備状況を記事にしました。  
中国空軍が沿海地区の基地に大量の J-6 無人機を並べているのを衛星写真で見ると、異様な感じがします。  
ドイツ軍の V-1 のような効果をねらうのか。第 2 次大戦のバトルオブブリテンを想起させる光景です。

中国海、空軍は、過去 2 年間、対台湾作戦を念頭に、戦闘機、早期警戒機、爆撃機、各種ミサイル陣地を配備してきた。台湾の防空は、有史以来最大の圧力に直面している。安慶基地の爆撃機第 10 師団は、全て H-6K 爆撃機に換装された。合計 18 機であり、日常的に台湾の東海岸に進出している。このほか航空兵第 8 師団にも H-6K の配備が開始された。H-6K の数の増加は、台湾に対する空中発射巡航ミサイル数の増加を意味する。



安慶基地

J-11 シリーズ戦闘機の前進配備もすでに開始された。2012 に建設された水門飛

行場では、J-11 戦闘機の所在、24 個の格納庫及び S-300 地对空ミサイル陣地が確認され、また相当大型の弾薬庫も発見された。J-11 の機体の塗装から J-11B であるかどうか注意する必要がある。



水門基地

このような基地の建設規模から、水門基地に配備された部隊は、固定編制であり、一時的な展開部隊ではないことを示している。距離は、台北から 240KM である。この基地に配備された J-11 は、滞空時間から、台湾東岸をぐるっと一周できる能力があると見られる。

その他の J-11 シリーズ戦闘機が配備された基地は：武夷山空軍基地があり、距離は台北から 454KM である。このように大型戦闘機を前進配備し、かつ縦深性を考慮していることは、中国空軍が台湾東岸への注意力を大々的に強化し、同時にまた中国本土の防空能力を強化していることを意味する。武夷山空軍基地には 10 個の格納庫が建設されただけであり、このことは、この基地の J-11 が機動的に運用される部隊である可能性が高い。



武夷山基地

また過去 2 年間、中国空軍は、台湾向けに多くの J-6 型無人攻撃機を配備した。その中の一部は対レーダー攻撃機である。J-6 型無人機を配備した飛行場は：武夷山飛行場に 50 機、しかも一部は格納庫を有していた。連城基地に 56 機。台湾との距離が最も近い恵山基地に 18 機。2017 年に龍田飛行場に J-6 無人機を 23 機配備した。或いはさらに多くの J-6 無人機が配備されるかもしれない。このことから中国空軍の作戦意図が明白になる。開戦初期において、J-6 無人機的大量攻撃により、台湾のレーダーシステム、指揮系統を混乱させ、同時に無人機による自動攻撃を実施する。台湾空軍のレーダーは、最初から、飛行速度、飛行コース、飛行高度、離陸した飛行場等の情報から、当然これが J-6 無人機であることは知っている。もしこれを迎撃したならば、大量の地对空ミサイルと戦闘機を消耗することになる。迎撃しなければ、J-6 無人機の攻撃を受ける。現在の配備状況から見ると、第 2 線飛行場は、J-8、J-7 型旧式戦闘機が完全に淘汰され、J-16 (蕪湖)、J-11B、J-10B 等に換装、配備された。航空兵第 2 師団の遂溪には 12 機の SU-35 がすでに配備を完了した。5 月に台湾東海岸に飛来した SU-35 は、同師団の所属機であろう。

2018 年 5 月に台湾を周回飛行した中国軍用機を見ると、ますます種類が多くなっている。官側報道は、KJ-2000、SU-35、J-10A、J-20 がこの飛行活動に参加したと述べている。Y-8 型電子妨害機、TU-154 偵察機については、すでに何度も台湾周回飛行を行っている。上述の各種航空機の飛行コースは、特に J-20 の飛行活動については詳細に研究する必要がある。

これらの周回飛行の目的について、KDR は以前に分析したことがある。第一は政治的、心理的威嚇である。次は、作戦準備のための見積もりである。様々な作戦を想定し、機種ごとの所要の燃料、弾薬を計算し、飛行コースの策定を行うのである。またパイロットの慣熟飛行も必要である。これは実戦に即した訓

練であり、鼎新基地で日常行われている戦技訓練とは異なる。

KDR の推測では、現在の訓練想定は、掩護戦闘機の掩護の下、H-6K 爆撃機を運用し、台湾東部に巡航ミサイル攻撃を行うものである。これに類似した演習は、台湾の F-16 戦闘機の作戦半径を考慮し、飛行コースはますます台湾本島から遠く離れることになる。巡航ミサイルはすでに衛星を利用した航法システムを使用しているため、原則的には、台湾北部或いは南部の空域から巡航ミサイルを発射し台湾東部沿岸の目標を攻撃することができる。或いはミサイル自身が、発射後、目標を再設定することができる。(REPROGRAMMING)

次は、J-20 型ステルス多用途戦闘機を運用した精密誘導爆撃であり、台湾東部の飛行場、港湾を麻痺させる。台湾周回活動に参加する航空機の種類と数がますます多くなったため、福建地区の予備飛行場の建設が盛んになった。このようにして各種航空機の台湾東部での滞空時間が大幅に増加した。

中国空軍機だけでなく、今後中国海軍空母や各種艦隊の艦船が台湾を周回航行する可能性がある。当然潜水艦を随伴する可能性が極めて高い。KDR は、過去の記事で海上自衛隊によって探知された 093B 核潜水艦を分析した。093B は、台湾を周回して帰投する途中に探知された可能性が最も高い。海上発射の YJ-18 対地巡航ミサイルは、台湾東部海域の水上艦、潜水艦から発射され、台湾東岸の目標を攻撃する可能性がある。

これらの活動は、平時には心理戦の色彩が濃い。したがって東海岸の電子偵察を行うため、今後は無人機を使用する可能性が極めて高い。東南沿海地区の上述の飛行場には、大部分無人機が配備されている。中国は、現在”中国版グローバルホーク”を試験中である。航続時間を大幅に延長し、台湾東岸の長期偵察を行う可能性が極めて高い。

沿海地区の作戦飛行場の数が多くなるほど、整備補給支援能力が強化される。また日本の航空自衛隊、海上自衛隊の東シナ海における活動が牽制される。

以上